

敷料について考える
 おが粉の衛生対策

昨年八月、普及センター管内のA農場の方が「大腸菌性乳房炎に罹った牛が死んでしまった」と話してくれました。

この時期は暑さと降雨（八月は平年に比べ三四％）で湿度が高まり、乳牛は乳房炎に罹りやすい環境であったと考えられます。昨年を振り返ると、環境性乳房炎の一つで、重篤な症状になる大腸菌性乳房炎発症率は七～九月に高かったことがわかりました（図一）。

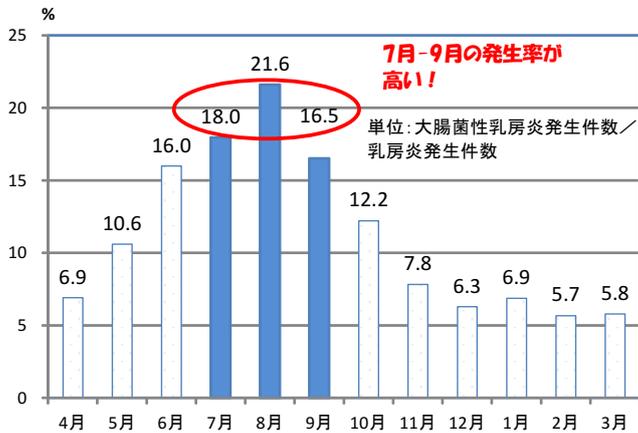


図1 大腸菌性乳房炎の割合 (H28年4月からH29年3月まで共済組合釧路西部事業所調べ)

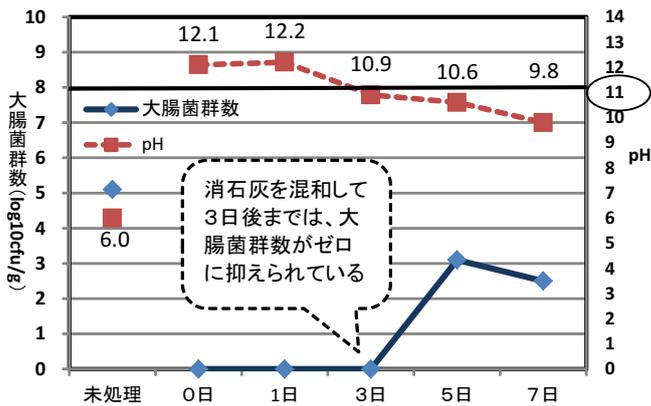


図2 消石灰混合後のpHおよび大腸菌群数の推移 (H29年根釧農業新技術発表会根室農業改良普及センター発表)

これからの季節は、乳房炎対策として敷料の衛生度を特に高める必要があります。そこで今回は、敷料として広く使用されているおが粉の衛生対策について紹介します。

おが粉の細菌数の実態

おが粉は扱いやすく、保水性・吸湿性に優れています。粒子が小さいため細菌が増えやすいという欠点があります。

根室農業改良普及センターで実施された試験結果によると、おが粉に消石灰を5％混合すると、三日目までpHは一を上回り、大腸菌群数はゼロに抑えられました。この結果

調査したおが粉の容積重 (1㎡あたり)	約200kg (152～211kg)
消石灰混合量 (重量比3～5%)	6～10kg
(重量比5%の場合) おが粉1㎡に対して、 消石灰10kg程度を混合	



写真1 一日使用するおが粉に消石灰を混ぜて翌日牛床に散布

図3 混合する消石灰量の目安 (出展は図2と同じ)

から、殺菌効果は三日間持続すると考えられます。(図二)。

現地事例

B農場では、牛床に使用するおが粉へ、消石灰を混ぜています。(写真一)。おが粉の重量は図三を参考にすると、重量比5%以上混合されていました。

ただし、牛床に残っていたおが粉には、使用前と同程度の細菌数が見つかったことから、乳房炎の予防には牛床を消毒する必要があります。とお考えられます。

おが粉を敷料に使用している農場で、乳房炎にお悩み方は、是非、消石灰の混合をご検討下さい。ただし、消石灰の混合量が多すぎると乳頭の荒れを助長しますので、混ぜる量に注意して下さい。

(平成二九年五月執筆)



写真2 未使用おが粉の細菌数



写真3 消石灰混合3日後の細菌数

そこで、未使用おが粉の細菌数を調査したところ、乳房炎に感染する可能性がある百万cfu以上の細菌数が見つかりました(写真二)。しかし、消石灰を混ぜたことで細菌数は三日後までゼロであることがわかりました(写真三)。